

「 神の栄光をあらわすために 」

ヨハネによる福音書 21章 15節～19節

説 教 本 庄 侑 子 牧 師

礼拝には、私たちを見つめるお方がおられます。私たちの深くに眠る罪を赦し、傷を癒し、神の栄光をあらわすための生と死に解き放つために、じっと見つめておられる方がいます。死から復活され、今も生きておられる主イエス・キリストです。

だれでも後悔を胸に秘めて生きています。普段は眠っているのに何かをきっかけにして目を覚まし、胸を締め付けてくる、そんな過去を持っているからです。主イエスはそれらを見つめ、癒すために来てくださいます。そして思ってもいなかった務めへと召し出してくださいます。

主イエスが復活されて後、弟子たちは疑いと迷いの中に沈んでいました。そんな彼らの帰りをしかし、主は待っておられ、食事を用意してくださいました。その食事はペテロにとって格別な食事となりました。主は3年前、私が裏切ることも、取り返しのつかない失敗をしてしまうことも全部ご存知の上で、それでも私を選んで下さった。この私を用い抜くための十字架の死と復活だった。そう気付かされたからです。

食事の後、主はペテロに3度問われました。「わたしを愛するか。」ペテロは心を痛めました。その痛みは、ペテロをペテロ以上にご存知の主が目覚めさせた痛みでした。ペテロには胸を搔きむしりたくなるような過去がありました。主イエスと、自分が語った言葉を裏切ってしまったのです。

主は復活された。私は赦していただいた。そう信じさせられてもなお、ペテロの傷は深く食い込んだままでした。復活の主は、朝の食事の後、ペテロの奥深くに踏み込んで語られました。

主はペテロをヨハネの子シモンと呼ばれました。ペテロという名前は主がつけて下さった名前でした。岩を意味し、この岩の上に教会を立てるとまで言われました(マタイによる福音書16章18節参照)。しかし、主はこの時、ペテロとは呼ばれませんでした。神の前では一人の罪人に過ぎないヨハネの子、しかし独り子を与えるほどに愛してやまないシモンを見つめておられたからです。

ペテロはヨハネの子シモンとして主の前に立たされました。自分が裏切った数だけ、3度問われました。復活の主と出会ってからもなお、ペテロを蝕み続ける罪、眠っている傷をペテロ自身に直視させ、その上で徹底的に赦し、癒すためです。

ペテロとは、偉大な指導者のことではありません。最も深く罪を犯し、最も深く傷つき、最も深く主に出会っていただき、赦され、癒された者の

ことです。だから岩なのです。ペテロを赦し、癒し、召してくださる主のご意思が硬いから、ペテロは岩なのです。

主は3度言われました。「わたしの羊を飼いなさい」。主はペテロを牧者の務めへと召し出されました。最も深く罪を犯し、最も深く赦されたあなただからこそ仕えることができる私の羊がいる。私の羊に仕えてほしい。それが、復活の主がペテロに手渡された務めでした。

この後、ペテロは殉教しました。そのような死に方で神の栄光をあらわした、聖書はそう伝えます。主イエスを信じて思い通りの死に方になるとは限りません。しかし、それでも良いのです。どのようなものとなろうとも、私たちの生と死は神の栄光をあらわすためのものとなる。そう断言できる根拠が世界に打ち立てられたからです。

私たちの人生で重要なことは何が起こるかではありません。神の子イエスが十字架にかかって死に、復活し、再び来てくださるということ。それ故に、私たちの生も死も神の栄光をあらわすためのものとなるということです。たとえ思いが隣人に届かないような終わりを迎えたとしても、過去の過ちも、深く食い込んだ傷も、隣人に仕えるためにすっかり用いられてしまう。

かつてペテロが燃えていた時、主は言われました。「あなたは私の行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになろう。」(13章36節)ペテロは言い返しました。「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます。」(37節)

あれから時が経ちました。命を捨てて下さったのは主の方でした。主はよみがえって、もう一度ペテロのところに来て下さいました。自分の罪を知り、怯えるペテロを徹底的に赦し、癒し、愛されました。そしてついに言われるのです。「わたしに従って来なさい」(19節)

ペテロには、もうそれで十分でした。今日何が起ころうとも、この復活の主が与えてくださる一日は神の栄光をあらわすための一日となる。そう徹底的に知らされてしまったからです。ペテロは確かに岩とされました。私たちも皆、この岩とされるために礼拝に招かれたのです。

(記 説教要約奉仕者)